

甲斐 隆弘

C 福島県 スパリゾートハワイアンズコース

帰りの飛行機の窓から眼下に広がる景色。雲間から見える水平線。海岸線、そして小さく寄り添う家々。そこにはいつもと変わらぬ人々の平穏な暮らしが見えた。ところが、ほんの数日前にこの眼で見、手で触れた福島県・小名浜港付近の惨状は、先の景色とは程遠いものだった。

そもそも私がこのツアーに参加したのは、今春ボランティアで支援活動に携わった知人の談話が大きく影響している。震災後、メディア等でその悲惨な様子は知っていたつもりだが、「現地でしか感じることの出来ない『空気』がある」と。そこに本ツアーのお誘いがあり、これはもう行くしかない。

まず海岸間近の学校付近で見た光景にショックを受けた。今だ高く盛られたガレキの山、建物は残るが1階部分は水圧であろう強大な力でグチャグチャに破壊された校舎。コンクリートの基礎だけが残り荒涼とした住宅地。それは正に「想定外」だった。

現場で歩き回るうち、小さな物を見付けた。地面に残された片方だけの運動靴。雑草に覆われちょっとさびしそう。「あの時」以来ひとりここで持主を待っているのだろうか？ 丁度運動会シーズン。元の持主はどこかで元気に駆け回っているのだろうか。それを切に願ってやまない。また、校舎に掛けられたままのスポーツ大会応援のたれ幕。「ぼくらもがんばってる。みんなもがんばって！」と逆に元気づけられるようだ。

被災された現地の校友三村氏、遠藤氏のお話を聞く中で印象に残っている事、それは勿論資金・物資等の支援はありがたいが、「遠い地の過ぎ去った出来事」と済ませず。今ある現状・苦難をこれからもずっと念頭において思い続けてほしい、という事。

様々な問題が山積みしている。しかし全国のひいては世界の人々の記憶から『3.11』が消え去らない限り、思い続ける限り、一步一步復興に向け前進していくだろう。

私も今回の体験を身近な人達に発信する事で、微弱ながら息の長い復興支援のお手伝いをさせていただきたい。共にがんばろう！

フラガールのみなさん、素敵なショーをありがとう！